## 2021年度ソニー教育財団幼児教育支援プログラム応募論文





# 「科学する心」の芽が生まれる 要因とは何か

~保育を語ろう会で見えてきたこと~





京都市楽只保育所

## 目次

1)	今年度の研究方針		1
2	実践事例		2
	A - 1 風がビューと吹いてきて(1歳児)	• • •	2
	A - 2 スンッ!?何この感じ?(2歳児)		2
	A-3 もしかして私のつくった絵具,いらないかもしれない…(大人)		3
	仮説1 固定観念に捉われないことが,科学する心を生み出すのではないか。		
	B - 1 水,どこいったん? (2歳児)		6
	B-2 雨,ここにいるよ。(2歳児)	• • •	7
	B-3 C-2 シュー,シュー(2 歳児)		7
		はないか。	
	C-1 小さな板ん児たち(0歳児~5歳児)		8
	B -3 C-2 シュー,シュー(2歳児)	• • •	15
	C-3 これはあかん,上げすぎや。(5歳児)	• • •	16
	仮説3 大人が失敗(危ない)と考えること程,子どもは面白みを感じるのではないか。 		
3	まとめ	• • •	18
4	今後の課題と方向性	• • •	20

注釈

本文中に、下記の語句を使い分けて使用している。

「科学する心」...(公財)ソニー教育財団が定義している「科学する心」。「科学する心」の芽...「科学する心」を培うための,乳幼児期の芽ばえの力。

1

楽只保育所は京都市北区に京都市営保育所として1921年に設立された歴史ある保育所である。 保育所周辺には寺院や公園があり、自然に多く恵まれた環境に立地している。近隣にある大学や児童 館との交流なども行っており、地域と密着している。現在150名が入所しており、様々な理由で援 助の必要な家庭や、医療的ケアの必要な児童、また発達面で支援を必要としている児童が在籍してい る。また、様々な国籍の方も在籍している。どの家庭、どの子どもにも支援を受ける権利があり、設 立時の大正時代から、その時代に合わせながら「人権を大切にする保育」を大切にしてきた。

統合・合併を繰り返しながら100年続いた本保育所は、来年4月に旧楽只小学校跡地へ移転する。 昨年度からソニー教育財団幼児教育支援プログラムへの挑戦をすることで、これまで大切にしてきた 保育実践を振り返る大きな機会となっており、子どもたちの無限の可能性を引き出すことに繋げてい きたい思いと共に、新しい場所での保育実践に繋いでいくための土台になると考えている。

昨年度は「楽しさが湧き上がる保育の土壌を作りたい~あるがままの生活に、豊かな体験を~」というタイトルで、子どもたちがごくありふれた日常の生活の豊かさから「科学する心」の芽が育まれるための、保育士(大人)の存在と役割について明らかにしてきた。今年度は、昨年度のチャレンジを通して、「科学する心」とは何かが分からなかった職員が分かり始め、もしかしたらこれも「科学する心」かもしれない、これが「科学する心」の芽かもしれないと、自主的に実践を持ち寄るようになってきた。そして保育観が違う一人ひとりの職員が話し込んでいくうちに「科学する心」を生み出す

ための保育実践についての正解は一つではないと感じてきた。そこで、あえて的を絞らずに研究を進めていくほうがお互いの保育観が理解でき、新しい気づきや学びが深まるのではないかと考え、仮説生成型の研究として進めることにした。そこで今年度は「科学する心の芽とは何かを探る」を保育所の重点目標とし、子どもたちに「科学する心」の芽が生まれるための要因を明らかにしていくことで、結果として3つの仮説を生成した。



研究方法に関しては、保育士同士の語り合いに重きを置き、3段階の方法で深めていった。まずは自由参加でざっくばらんに保育実践を語り合う「保育を語ろう会」の実施(月2回)。保育を語ろう会で集まった事例を集約して保育を再定義しながら仮説を立てていく「科学する心プロジェクトチーム」(5月より随時)。最後に科学する心プロジェクトチームが立てた仮説について保育を語り合い深めていく全員参加の職員会議(月2回)である。本保育所で研究を進めてきた「保育士同士の語り合い」を読み手に伝えたいねらいがあり、各事例の横に職員で話し合った意見や議論を記述した。

#### 楽只保育所の考える「科学する心」の芽とは

子どもたちは日常の遊びの中で「やってみたいことに対しての躊躇のなさ、瞬発力」「うまくいかなかったときにこそ面白がって工夫・調整する力」「自分で考え深めていく力」を培っている。これらは学力にすぐに結びつくような"今すぐ結果が見えるような力"ではない。しかし大人になって壁にぶつかった時に、しなやかに乗り越えていけるような、その子自身の生きていくために必要な力である。昨年度には「大人との関わりの中で、初めての驚きや感動を共感し合うことができ、豊かな感性が芽生えていく力(お宝)」を科学する心の芽として考えていたが、今年度はさらに「自分らしく生きていくために必要な力」も科学する心の芽だと捉えるようにしている。

## A - 1 風がビューと吹いてきて (1歳児)

11月上旬

心地よい天気だったので、テラスで絵を描こうと準備をしようと、テラスの机の上に画用紙を並べ始めた。保育士が準備している様子を見て、絵を描くことの大好きなRくんは、早速机の前にやってきた。今すぐにでも描きたくて、



うずうずしている様子である。Yくんも,何か楽しいことが始まるのではないかと,Rくんの隣に立ってじぃっと待っていた。保育士がクレパスを出して,Rくんはクレパスを手にして夢中になって絵を描き始めた。ようやく描き始めたのに,強い風がビューと吹いてきたので,画用紙が飛ばされてしまった。夢中で描いているRくんの集中が途切れるのではないかと $^{*1}$ 保育士が慌てて画用紙を拾い上げようとしたものの,むしろ逆で R くんは真剣な表情でそのまま絵を描き続け,床に落ちたことなんかお構いなしに,グルグルと大きな丸を書き始めた。 $^{*2}$ 床が凸凹であることで,クレパスで描いていた線がふにゃふにゃとなったり,凸凹となる感覚が楽しいことに新たに気づいたりした様子であった。

それをじぃーと見ていたYくんは、その変化を見逃さずに気づいていた。すると\*\*3自分の前に置いてあった画用紙を、さっと床に落として描き始めたのだ。もちろんYくんの画用紙にも凸凹が浮かび上がってきて、自分も同じように出来たことを嬉しくなり、Yくんも夢中で描き始めた。\*\*4新しい発見をしたRくんとYくんの姿を見て、画用紙を吹き飛ばした風に感謝しないといけないと思った。

#### 保育を語ろう会の議論から

※1大 人 すぐに拾いたくなるが、子どもの様子から拾うことを躊躇した保育士の行動が「科学する心」の芽が生まれることに繋がった。大人にほんの少しの「間」があることで、「科学する心」の芽を育むチャンスが生まれていく。

\*\*2子ども 机の上では味わえない感覚を感じている。いつもと違うことに気づき、そこに面白さを感じることが「科学する心」を育てていくのではないか。

\*\*3子ども わざと落としてまで やる行動力。思わず注意してしま いそうになるが、保育士はそっと 見守り、子どもがどうするかな? と様子を見ているほうが面白い結 果を生む。子どもたちは、この瞬間 的な行動力を大切にして欲しい。

※4環 境 造形活動は室内で行っていたら生まれていないエピソード。あえて自然の影響を受ける場所を選んだことで、予測不能なことが起きた。

## A - 2 スンッ!?何この感じ?(2歳児)

5月中旬

園庭のプランターの土の上に、綿毛の固まりが5つほど置かれていた。それを\*\*1発見した保育士が「あれ?なんでこんな所に綿毛がたくさんあるんだろう?」と綿毛を拾い上げ、手にとってみた。綿

毛は飛んでいく時のようにはふん わりとはしておらず, むしろしっと り濡れていて一つの固まりになっ ていた。

もしかしたら子どもがわざと綿 毛を抜いて置いていたのかもしれ



#### 保育を語ろう会の議論から

※1大 人 そのまま疑問に思わずに通り過ぎても不思議ではない場面。ほんの少しの違和感に気づき、保育士も試してみようとしたことが、子どもの隠れた発見に気づくことに繋がった。子どもたちの隠れた発見を見い出す「眼」を、保育士は養っていきたい。

ないと思い、プランターの横に生えていたノゲシのまだ開いていない綿毛を抜いてみることにした。

花びらであった部分を手でつまみ、抜いてみると、「スンッ!!」 という何とも言えない感覚で気持ちよく抜くことが出来た。

この感覚は\*\*2今までに感じたことのないくらいに独特で,気持ちの良い感覚であった。きっとプランターの土の上に綿毛を置いたのは,この感覚を知っている子どもが抜いて置いたのだと確信した。と同時に,きっと子どもが偶然知り得た感覚を,人知れず何度も試している姿を想像して,子どもの発見する力に驚いた。誰かに伝えたい衝動に駆られ,近くにいたHちゃんに「ねえ,ねえ,この綿毛を引っ張ってみて?」と誘うと,\*\*3Hちゃんは綿毛を抜いてみた。「スンツ!!」Hちゃんは驚いた表情で,保育士と目が合った。保育士が感じたように,Hちゃんも同じ独特な感覚に気づいたのだ。その様子を見て保育士は,Hちゃんに「ねっ?」と相槌を求めた。それから「スンッ!!」の綿毛抜きは,子どもたちの朝一番の

楽しみになった。気持ちよく抜ける状態の綿毛は、まだ綿毛が閉じているほんの一時に限られるからである。園庭に生えているノゲシの場所を子どもたちはよく覚えていて、綿毛抜きがブームとなった。しばらくしてタンポポが咲



く季節になった。※4タンポポの綿毛を見て,同じように出来るかなと保育士が試してみると,ノゲシのようには抜けないことが分かった。綿毛が出来る植物が何でも「スンッ!!」が出来る訳ではないことが分かった。また、マリーゴールドは綿毛が出来ないが、「スンッ!!」よりも重たい「ズンッ!!」という感じで抜けることも分かった。それから※5季節が変わり新しい野草を見かける度に、保育士とHちゃんでひっそりと試し続けている。

※2大 人 実際に触れてみて感じて分かる感覚である。子どもが何に魅了されて楽しんでいるのかを同じ目線になって試してみることの大切さを確認した。

\*\*3子ども 保育士がH児を誘っているが、結果は知らせていない。 H児が実際にやってみてありのままどう感じるのかを大切にしたかったからの声掛けではないか。

※ 4大 人 その後も興味を持って他の植物で試している。こういった探求心は、大人こそしっかりと持ち続けていたい。大人の探求している姿を見ることで、子どもにも影響して、探求心のある子どもが育つのではないだろうか。

※5環 境 4年前から「自分の身 を自分で守れる身体」「命の営みが 見える環境」をテーマに、園庭環境 を整えてきた。限られた予算の中 の工夫の一つとして, 保育士が種 から花苗を育てることで植物で遊 ぶ機会を増やす取組を行ってい る。2020年度世田谷区立希望丘保 育園の実践論文「虫のようにしな やかに野草のようにたくましい心 を育てる~のっぱらプロジェクト の取り組み~」から栽培種だけで はなく自然物である野草を増やす と様々な遊びに発展するのだと学 び、園庭に小さなのっぱらを整備 したことで,季節の野草が増えた。

## A-3 もしかして私のつくった絵具、いらないかもしれない $\cdots$ (大人)

11月上旬

乳児フリーである私は、その日は1歳児の担任の休暇保障で保育をしていた。朝にクラスに入ると、担任のM先生から「今日は、ローラーで絵具遊びをしたいので、こんな動き方をして欲しい」と話しかけられ、簡単な打ち合わせをした。子どもたちが少しずつ登所し、M先生は丁寧に保護者と話し、子どもの情報を共有していた。私はその間保育をしていたが、園庭のテラスで絵具遊びをするとの

#### 保育を語ろう会の議論から

※1子ども K児は以前にオシロイバナで色水遊びをしていたが、その経験からもしかしたら絵も描けるかもしれないと思い、試しにこすってみたのだと思う。

ことだったので、子どもたちと一緒に園庭に出た。M先生は絵具を 溶きに行きたいと言われ、私はテラスで子どもたちと遊びながら待 つことにした。

M先生がテラスに準備した机に、模造紙が貼られていた。私は「これから何するのかな、楽しみやなぁ」と子どもたちと話しながら待っていると、1 歳児のK児が、隣にある畑からオシロイバナをおもむろに摘んできた。 $*^1$  K児は模造紙の上にオシロイバナを一生懸命こすっている。 $*^2$  M先生が保育のために準備していた模造紙なのにどうしようかと一瞬止めようかとも考えたが、真剣な表情でこすっているK児の指の先から、オシロイバナの濃いピンク色が模造紙に映っているのが見えた。私はK児の発見に心を奪われ「きれいな色やねぇ」と声をかけた。K 児は一瞬、嬉しそうな表情を見せ、また

\*\*3 K児の遊びに気づいた他 児も、畑にオシロイバナを摘 みに行く。きっと他児も K児 の真似をしたいのだろうと 思った。私は、M先生がこれから自分で考えたです。 があっただろうに、子いかであるがでしまったがある。 使って、それを止めないしまたといる。 という思うかな、少しまたいないないないないない。 でと心配になった。 したいのだろうないないとまたいないない。 したいのだろうないないというといるないない。 というになった。 したいのだろうないというといるないないない。 というになった。 したいたもの遊びに気づいた。 というになった。 したいのだろうないないまたいないないないないないない。 というになった。 したいのだろうないというというというになった。 したいのだろうというというというにないた。 したいのだろうに気づいた。 したいのだろうというというというというにないた。 というにないた。 というにないた。

真剣にこすり始めた。





児の発見と他児への遊びの広がりは、何より子どもの主体的な活動であるし、興味・意欲を育む乳児期で大切な芽生えの姿であると思った。そして何よりM先生とは、日頃から雑談も交えながら保育を話したりする機会もあり、予想外の活動にもきっと柔軟に受け止めてくれるだろうと考えた。

絵具の準備が終わり戻ってきたM先生に、私はK児の姿の嬉しさ



とM先生への申し訳なさが入り混じった表情で「せんせい、Kちゃんがね,,,」と声を掛けた。するとM先生はKちゃんの姿をじぃーと見た。模

「もしかしてできるかもしれないから、やってみたい!」と思った時に、 K児が実際にやれたことが科学する心の芽を育てた。

※2大 人 担任からの打ち合わせを済ませた後の出来事であったので、フリーとしては意向を汲みない。担任の思いと子どもの思いもある。これで、担任の思いと子ともしばあるが、フリーとしての思いもある。これが、フリーとしての思いもある。ことは、普段からの人間関係が築いるかどうかが大きいの良好をもたろうか。「大人と大人の良好をもたろうか。「大人と大人の良好をもたろうか。「大人と大人の良好をもたろうか。「大人と大人の良好をもたろうかという話となった。

\*\*3子ども 新しいことを自分で見つけて楽しむ子どももいれば、周りの面白そうなことを見つけて真似をする子どももいる。「学ぶことは真似ること」から始まるように、保育の中で真似る機会も十分に保障していきたい。

\*\* 4大 人 自分なら咄嗟の時に こんな判断が出来ただろうかという意見が出た。M保育士が子ども の姿を見て、オシロイバナで絵を 描く活動に変更したこともとても 良かったが、子どもの興味が一段 落したときに、予定していたロー ラー遊びを提供したことも良かっ たのではないかという話し合いと なった。子どもの主体性を大切に していく保育ではあるが、同時に 保育士の主体性も大切にして実践 を進めていきたい。

造紙にはきれいなピンク色の小さな絵が描かれている。K児の横には、オシロイバナを小さな手にもった他児が、いまにも遊ぼうとして机の横に立っていた。\*\*4全てを察知したM先生。私が感じたように、子どもたちの姿に心を奪われていた。M先生の顔を覗くと「わぁ、すごい!・・・もしかしたら、私の作った絵具なんて、いらないかもしれ

ない」とつぶやくM先生がいた。純粋に心から出てきた言葉だと思った。私はM先生がその行為を受 け入れてくれた安堵だけではなく、保育で大切にしたいことが深いところで通じ合えたような気がし てとても嬉しくなった。M先生は自分の作った絵具を靴箱の上に置き,しばらく子どもと一緒に,オ シロイバナのこすり出しを一緒に楽しんで遊んでいた。十分に堪能してから子どもたちの興味がそこ から離れていった頃、「さあ、こっちでも遊ぼうか。」と言って、ローラーを使った絵具遊びを始めた。

│事例A-1 | 事例A-2 | 事例A-3 | から浮かび上がってきた。

#### 仮説1|固定観念に捉われないことが,科学する心を生み出すのではないか。

もしかしたら風で落ちた画用紙を机に戻したかもしれない(事例 A-1), 土の上にある綿毛に気も 留めず見逃して通り過ぎたかもしれない(事例 A-2),「先生がくるまでちゃんと待っていてね」とオ シロイバナで模造紙をこすることを止めたかもしれない (事例 A-3)。 その判断も保育の中では、決し て間違いとも言えない。そんな一瞬の場面であるし、その時の判断次第で、こんな豊かな関わりが生 まれることがなかった可能性もある。しかしこの一瞬の判断のなかに,「科学する心」の芽が子どもに 育まれるための大きな役割があるのではないだろうか。 職員会議のグループ討議で事例を検討した中 で「固定観念に捉われていないからこそ生まれてきた事例ではないか」という意見が出た。またそこ から広がり保育計画の話となった。

「固定観念とは,心の中にこり固まっていて,他人の意見や周りの状況によって変化せず,行動を 規定するような観念 (大辞林第3版) | のことである。保育実践の中では、年間計画があり、月案があ り、日案があり、様々な計画を立てながら進めている。保育士が「計画通りに進めていきたい」心境 になることはごく当たり前のことである。しかし保育士が想定している計画通り進めていく保育が、 果たして子どもたちの「科学する心」を育むのだろうか。保育実践を進めるうえで、保育計画を立て ることは重要である。しかし大人も子どもも保育の中で自分の思うようにいくことより,思うように いかないことが多い中で,時には寄り道や回り道を楽しむことが必要である。むしろ寄り道や回り道 のなかにこそ「科学する心」の芽が育つ要素がたくさん含まれていると考えている。そこで保育計画 を立てる際には、「科学する心 | の芽が育つ保育実践を行うために 「計画通り進まないことを想定する なかで,子どもたちは何を発見し学んでいくのかを面白がる余白のある保育計画」を立てることが重 要なのではないかと共通認識することが出来た。

以上、大人が固定観念に捉われていない考えや発想を持つことは、子どもたちの「科学する心」の 芽が生まれる保育のために非常に重要な視点であることを確認した。 さらに保育実践を進めるうえで 重要な要素とは何かを,職員会議で話し合った結果をまとめたのが図1である。



|子ども|

|大人|

|環境|

<図1>

否定されない安心感 ふわっと自由にできる時間 やりたいことが認めてもらえる 共感してもらえる喜び 友だちとの関係性

間が大事,待つこと 大人自身もやってみる 大人の思いとズレてもOK 子どもの行動を止めない 許容する職員集団の雰囲気 禁止のルールが少ない 素材に恵まれている 自然と関わることが出来る いつでも遊べる環境 予測不能な要素

楽しさの湧き上がる保育の土壌

梅雨に入り、雨が続いていました。ようやくその日の朝、雨が止みました。「さあ、雨もあがったし、お外に行こう」と保育士が声を掛けると、久しぶりの園庭に嬉しそうな子どもたちの顔がありました。園庭に出るとさっきまで雨が降っていたため、いたるところに水たまりが出来ていました。それを見つけた数人の子どもたちがバケツとスコップをもって水を集め始めました。 Nくんは砂遊びが好きで、毎日のように砂場でスコップを使って砂を掘って遊んでいます。この日もスコップを手に砂場へ行きました。砂場にはまだ猫除けのブルーシートがかけてあったため、Nくんは保育士を呼びに来ました。「取ろうね」と言いながら砂場に近づくと、かなりの雨水がブルーシートの上にたまっています。雨水が砂場に入らない

よう周りによけるようにブルーシートを動かそうにも重くて動きません。Nくんも早く遊びたい一心で保育士と一緒に「よいしょ,よいしょ」と引っ張ってくれます。その様子を見てSくんも手伝いに来てくれました。でも動きません。



\*\*1これは仕方がないと思い,水は砂場に入ってしまうかもしれないけど,そのまま引っ張ってみました。やはり雨水は砂場の中に入り,池のようになってしまいました。

Sくんは「いけみたい」と言いながら少し嬉しそうな表情。Nくんは「やっとすなあそびができる」ではなく「やったぁ、みずがいっぱい」という感じで、パシャンと長靴で水の中に入りました。ところが、しばらくすると水が少なくなり、池が小さくなっていき、最後にはなくなってしまいました。Sくんは「あれ?」と不思議そうです。Nくんも「ないなぁ」と砂場を見ています。

\*\*2保育士が「水はどこに行ったのかな?」と聞くと、\*\*3 Nくんは今まで水のあったところを指さして「ここ!」と言って、持っていたスコップで砂を掘り始めました。Sくんも「ここにはいってい



ったな」と言いながら掘り始めました。Nくんは掘っても,掘っても水が出てこないため「ない,ない」と困った顔をしています。次に※4 S くんは,おもちゃ棚から雨水の入ったおもちゃを取り出し,

#### 保育を語ろう会の議論から

※1大 人 時には「まあいいか」 という適度な諦めも肝心。今まで は砂場に水を入れないようにして いたけど、この時は水を入れてし まったことによる発見となった。

※2大 人 保育士は答えを出さず、一緒に考える姿勢で見守っている。子どもたち同士で探求し、思考を深めているが、ありのままの姿を見守っている大人の存在も大切ではないだろうか。放任と見守りの違い。

\*\*3子ども 水を物体的でなくならないものだと考えているから,不思議に感じたのではないか。水がどう地面の下に吸収されていくのか大人でも説明は難しい。N児とS児が同じ体験をして,子ども同士で「なんで?」と考えたこと自体が楽しかったのでは。

\*\*4子ども 同じことをもう一度 試している。自分自身が不思議と 感じたから、本気で「なんでだろう」と考え、再度試したくなったの ではないだろうか。試したくなったときに、試すことができる環境 も大事。

\*\*5子ども 水たまりの水は地面に残っているのに、砂場の水は残っていないことには気がついていない。このような経験を繰り返すうちに、幼児期になった時に気づくのかもしれないが、今この瞬間にある「なんでだろう」という問いが大切な訳であって、答えを知りたいのではないのだと思う。

砂場にその水を流し始めました。「あ、なくなった!」とSくん。またおもちゃ棚に行って雨水の入ったおもちゃを探し砂場に流す、を繰り返しました。\*\*5Sくんは雨水の入ったおもちゃが無くなると周

りを見て、水たまりの水に目を付けました。今度はバケツをもって水を集め、砂場に流しています。 流してはすぐ、スコップでその部分を掘って水を探しました。何度流してもなくなる水に、不思議そ うなSくんとNくんでした。

#### B-2 雨,ここにいるよ。(2歳児)

6月上旬



今日は本降りの雨。保育士がわざと子どもたちに「園庭で遊ぶ?」と聞くと、「あそべないよ、だってあめだもん」とツッコミを入れてくれるくらいの大雨です。 今日は何をして遊ぼうかなと保育士が悩んでいると、\*\*1子どもた

ち同士でも「じゃあ,おさんぽにいこう」「だめだよ,だってあめだもん」と陽気にやりとりを楽しんでいました。本当によく降るので,雨の様子を見ようとテラスに出てみることにしました。ついこの間に砂場の水がなくなることを不思議に思っていたSくんは,この雨をどのように感じるのかを見てみたくなったのです。

空から落ちてくる大粒の雨を、子どもたちは眺めています。Sくんが「あ、あめここにいるよ」と指さしたのは、園庭の木の葉っぱ。葉っぱの先にしずくがキラキラと光っていました。※2しばらく様子をみると、パンッと葉っぱが跳ねてしずくが弾いて落ちていくので、子どもたちは「あ、あめがとんだよ」と面白そうに見ていました。そんな時に※3 Sくんが何やら「なくなるなぁ」と不思議そうにしていました。大粒の雨が地面に落ちると、その雨が地面に消えてなくなる様子を見ていました。この間の砂場で水がなくなる不思議が、まだ S くんの中に残っているのだと思いました。「ぼく、あめつかまえるんだ」とプリンカップを持ってきて、空に向かって手を伸ばしました。身体を濡らしながらもしばらくかざしていると、プリンカップの底に水が溜まりました。※4 S くんは満足そうな顔をしていました。

#### 保育を語ろう会の議論から

※1大 人 雨の日の保育は憂鬱 にもなるが、楽しそうにしている 子どもたちの様子を見て、何か楽 しいことをしたいと考えた結果、素敵なエピソードが始まったのではないか。

※2環 境 雨などその時の自然 (天候)を積極的に保育に活用す ることで、科学する心の芽が育つ 機会が増えるではないか。

\*\*3子ども S くんはまだ雨を物だと考えているのではないだろうか。水を物だと考えているため、消えてしまうことが不思議で仕方ないのだと思う。

\*\*4子ども 砂場の土とプリンカップとは違うが、やっと雨を捕まえられた達成感があったのではないか。2歳児なので嬉しい気持ちで終わっているが、幼児期になると「水を捕まえられるものと捕まえなれないものの違い」についても探求していくかもしれない。

## B-3 C-2 シュー,シュー (2歳児)

6月中旬

実践は15ページに記載。S児が全く違う板の事例の場面でも水の探求をしていた。保育士が考えるうえで連続していない場面であっても、子どもにとっては探求が続いていることがある。

仮説2|自ら不思議と感じることで,より深い探求に繋がっていくのではないか。

S児の「水」に対する探求を、3つの事例で追いかけてみた。砂場の水(雨)が無くなっていく様

子に不思議を感じた S 児。色々試していた(事例 B-1)が,答えはすぐには分からなかった。 2 週間後の大雨の日。雨を見つめる S 児の瞳を見て,きっと心の中に水への不思議が残っているだろうと気づいた保育士が, S 児がどのように雨を感じるのかを見てみたくなり,大雨のテラスで一緒に過ごすことにした(事例 B-2)。激しい雨は地面に叩きつけられたあとにやっぱりなくなっていく。砂場と同じようになくなる雨をどうしたら捕まえることが出来るのだろうかと,プリンカップを持ってきた S 児。自分の力で捕まえられたことで,雨(水)により親しみを感じたのかもしれない。その後, S 児は園庭に出る度に水で遊んでいる姿があった。そして 1 週間後の暑い日, S 児はウォータースライダーには興味を示さず,大きな水たまりで泥水をプリンカップに入れて遊んでいた。普段からじっくり周りの様子を見てから遊び始める S 児は,自分のやりたい遊びを見つけることに時間がかかることもしばしばある。周りの子どもはすでに入室して給食も始まろうかとしている時間ではあったが,水に浮いた板をシューと動かせることに気づいたのはそんな時の偶然の発見である(事例 S-3 S-2)。生活の日課もあるが,サッカーで例えるならばロスタイムのような時間があっても良いのではないだろうか。

S児の発見は、保育士が「水に浮く板は簡単に動かせる」と単に教えることよりも、学んだ事象は同じだとしても質が全然違うと考えている。そしてその質が保障できたとしたら、子ども自身が心の奥底から湧き出してくるくらいの不思議さを感じることに繋がっていく。そうなると、その後は例え保育士を介さなくても、子ども自ら試し探求していくのだと考えている。

だからこそあえて保育士が不思議さを感じさせるような保育をするのではなく、子どもの中にある内なる力を信じて、いかに子ども自身が不思議さを感じられる環境を創り出すことを大切に実践していきたい。そのために必要な要素を職員会議で話し合った結果をまとめたものが図2である。

## |子ども| | 環境 | <図2>

その子なりの探求を大切に 不思議を共感できる仲間 発見することが楽しい なんでだろうと思えること 試したいときに試せる

一緒に探求する姿勢答えを言わない保育所全体で保育することで一人ひとりの興味を把握子どもの気持ちを知りたいと思う心(考え)

同じテーマで様々な環境 じっくり関われる時間 ロスタイム 偶然が重なる環境(水+凸 凹の地面+板など)

楽しさの湧き上がる保育の土壌

#### C-1 小さな板ん児たち(O歳児~5歳児)

1月下旬~8月中旬継続中

2020年秋「感覚過敏の子どもにも竹馬を楽しんで欲しい」そんな職員の思いから始まった「木馬」づくり。足の親指を使わずに乗ることの出来る木馬という存在を知った職員たちが、手作りの木馬を作ることになった。初めて電動工具を使う職員も、慣れない手つきではあるものの、教え合いながら無事に木馬が完成した。少し多めに仕入れていた長さ1メートルほどの材料の板は、3枚残ることになった。しばらく存在を忘れかけていた3枚の板。年度が変わっ



た2021年冬。丸太の上に乗せたらもしかしたら一本橋に使えるかもしれないと考えた職員が、乳児園庭に置いてみた。すると一本橋で遊んでいた子どもたちが、そのうちに板を使って次々と遊びを

広げていった。"保育を語ろう会"で度々その様子は話題に挙がり、大人の想像を遥かに超えた子どもたちの遊びの発想と単純な板で無限の遊びが繰り広げられる様子に、職員一同驚くこととなった。

しかし順風満帆に板の遊びが広がっていった訳ではない。最初に板を出した時に子どもたちは興味を持って一本橋のように歩き始めたが、子どもたちはすぐに飽きてしまって遊ぶことを止めてしまった。大人の意図が子どもたちに伝わってしまい、子ども自身が工夫する余地がなかったことが原因のように感じた。大人が提供した環境で遊ぶだけでは、子どもがその環境に遊ばされているような気がするのであろう。以前冬に氷遊びをしようと計画した。寒くなり、園庭のタイヤの内側や園庭のおもちゃに残った水が凍り、子どもたちが発見して集めて遊んでいた。「もっと氷がたくさんあると遊びが広がるに違いない」とプリンカップ50個に水を張り、一晩わざと園庭に置いたことがあった。しかし保育士の思惑は外れ、子どもたちはさほど興味を示さなかった。明らかに準備をされたものに対して、興味が惹かれないのだ。以前の経験もあり、もっと子どもからの発想が広がるような工夫は出来ないのか考えてみた。そこで園庭に埋め込んである細い丸太の上に置いてみることにした。最初よりも不安定な場所でなおかつ大人の意図を感じさせない、雑然とした感じで置いておくことを意識したのは、子どもの発想を誘い出すような提供の方法を考えたからである。

#### <図3>板の遊びの導入



1)保育士が丸太の上に板を置いてみた さっそく遊び始める子どもたちであった が、板を渡ることに慣れてしまうと、遊 びに飽きてしまう。もっと自由な発想が 生まれて欲しいが、どのようにしたらよ いのか悩んだ。



2)次は板を不安定な場所に置いてみたなんでこんなところに置いてあるの?という様子。なんでもやってみたい行動派のKくんがてくてくてくと板の上を歩いてみると、ガタッと音がして板が動いた。なんだろう?と驚いた表情。



3) 真似をする子どもが出てきた その様子を見ていたRちゃん。前を向い て渡るのは怖いのか、カニ歩きで渡って みる。やっぱりガタッと音がして板が動 いた。あれ、何か面白そうなことが始ま っているぞと周りの子どもも気づいた。





4) 色々な遊び方を試行錯誤していく たくさん子どもが集まってきたから、や りたい思いのぶつかり合い。トラブルも 増えてしまうけど、2人でやるからこそ もっと面白い遊びも見つけ出して、楽し くなってきた様子。 そうして何でもやってみたいKくんから始まった板の遊び。Kくんがやってみたからこそ安心して試すことが出来たRちゃん。Rちゃんは少し怖いのでそろりそろりと渡っていたが、スローペースが功を奏して板がガタッとなるポイントを発見した。するとそのポイントで立ち止まったままRちゃんは身体のバランスを左右に変えることで、板がカタコト動くことに気づいた。

板がカタコトしているRちゃんの様子を見ていたYくんは、カタコトしている板を止めたくなって足を乗せようとする。するとRちゃんは邪魔をされたと思って怒り出す。諦められないYくんは、Rちゃんが板の場所を離れるのを待っていて、同じように板の真ん中に立って身体を揺らしてみると、同じように板がカタコトなって面白いことに気づく。

今度はHちゃんがYくんの遊んでいる板に乗ってみる。するとHちゃんの体重で板が動かなくなり、止まってしまった。Yくんが真ん中でカタコトさせることを諦めて、板から出ようと反対側に歩いていくと、ゆっくりHちゃんが上に上がっていく。シーソーみたいな遊びはこんなやりとりから偶然生まれ、しばらく色々な子どもが熱中して遊ぶようになった。2週間ほどガタッとかカタコトで遊んでいた子どもたちだが、あれだけ熱中していた遊びも不思議と2週間もすれば熱が冷め、また全然違うことを考えて遊びだすようになっていった。

子どもの姿を観察すると、一定の遊び方に飽きたとしても、「板で何かを生み出して遊びを創り出す」という行為は続いていた。これは板という素材の独特な魅力が影響しているのではないだろうか。板自身は水や砂のように形が容易に変化するものではない。子どもたちが関わること、何かと組み合わせることで、板の役割が変化していく。どんな役割があり遊び方が出来るのかは、子ども自身が試すことを繰り返すなかで気づいていく。この行為に子どもが魅了されているのだと思う。

板の遊びの一例を挙げてみると、板の上に寝そべって身体のバランスでカタコトさせる子、板を動かすことによって板と地面の隙間の光と影が変化する様子を興味深く見ている子、板をナナメにおいて色んなものを滑らすうちにピーターカーを滑らす子は、ピーターカーが前向きだとハンドルが動き途中で落ちてしまうが、後ろ向きに滑らすとハンドルが動かずに板の最後まで滑ることを発見していた。様々な「板の遊び」を職員で共有しながら、変遷をウェブ図に示してみた。玄関ホールに掲示にして、子どもたちの様子を保護者と一緒











に共有し楽しんできた「板の遊び」ウェブ図を紹介する(12~13頁)。ウェブ図にすると、作られた遊具でもないただの板からいかに子どもたちが発想豊かで様々な遊びを繰り広げてきたかがよく分かる。玄関ホールに掲示して保護者と共有することで、ただ遊んでいるだけではなくて、遊びの中から「科学する心」の芽が生まれ、探求する子どもたちの学びについても伝える良い機会となった。また、遊びの広がりを見ていくと、乳児と幼児との遊びの広がり方の違いに気づいた。遊びの広がり方の違いについては図4にまとめてみた。

幼児で板の遊びをスタートさせた際,新4・5歳児は板をどのように使うのかがあまり分からず興味を示さなかったのに対して,新3歳児が色々な方法で積極的に試して遊んでいた。これは新3歳児が,昨年度に乳児棟で2歳児として「板の遊び」を遊び込んでいたことが影響したと考えている。直感的で様々な角度から遊ぶ乳児期に,いかに子どもが満足して遊び込むのかが,その後に友だちとイメージを持って関わる「幼児期の遊びの発想の広がり」に影響を与えているのではないだろうか。

#### <図4>年齢別「板の遊びの広がり方」



#### < 0 歳児>

- •無関心
- ・板と意識せずにハイハイで横切る
- ・ハイハイでちょっとガタガタするので 怖がったり気にはしている
- ・板があることを意識して避ける



#### <2歳児>

- ・渡る、飛ぶ、運ぶ、物を飛ばす
- 友だちと関わって遊ぼうとする
- ・思いがぶつかりケンカをする
- ・直感的に遊びを見つける
- ・板を移動して色々と試してみる



#### <1歳児>

- ・大人と一緒に座ってみる
- ・大きい子の真似をしようとする
- その場で遊ぶ
- ・乗る,立つ,座る,降りられないと大 人に助けを求める





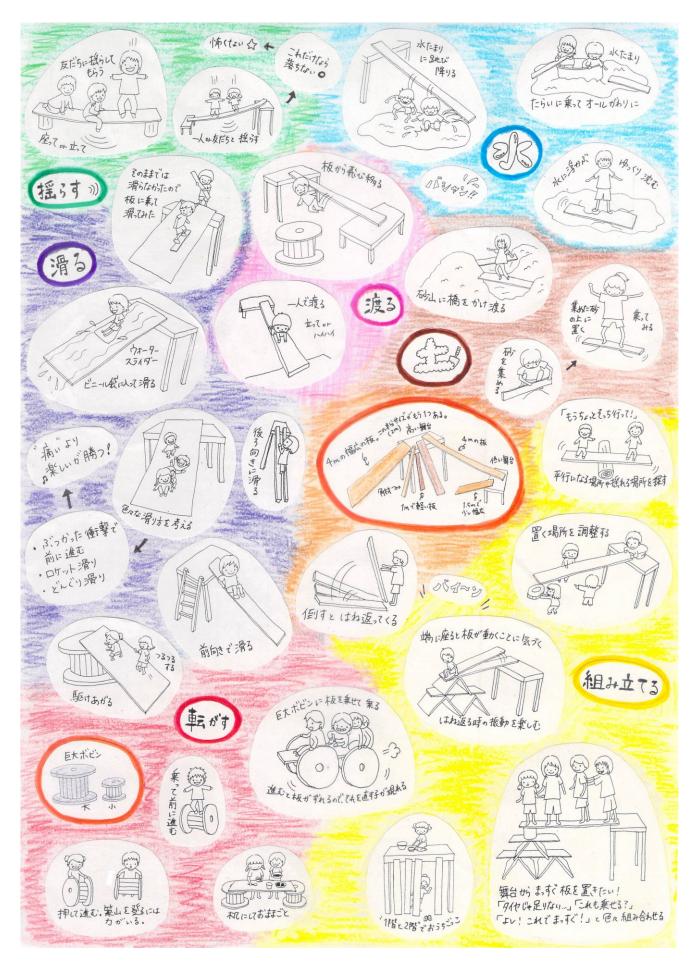
- ・イメージに向かって作り上げる
- ・友だちと会話をとおして共有する
- ・友だちと意見を調整しながら作る
- ・より複雑なものを作り上げる
- リスクのある遊びを楽しむ







<図5>ウェブ図「板の遊び」乳児バージョン



<図6>ウェブ図「板の遊び」幼児バージョン

6月に「板の遊び」について職員にアンケートを実施した。保育士が遊びを提供しなくても、次々に遊びを生み出していく子どもの姿から、様々なことを感じて考え、子どもの姿から保育士の豊かな学びになったことが読み取れる。特に安全面の配慮については、子どもの主体的な遊びを保障するために、一人ひとりの保育士が葛藤している様子が伝わってきた。保育士の力量や経験も異なるなかで、強引に推し進めることなく、不安や葛藤を職員間で出し合う中で、今後もリスクとハザードの管理を高めていきたい。子どもたちが想像して、創造して、広がっていった「板の遊び」。この一つの遊びに焦点を当て、職員全体で語り合い深め合うことで、遊びの豊かさ、複雑さ、大人が予測できない考えの深さ、そこで育つ「科学する心」の芽とは何かに気づくことが出来た。今もなお「板の遊び」は続いているので、子どもの姿を面白がりながら、大人も一緒に子どもたちと探求していきたい。

< 図 7 > 「板の遊び」についての職員アンケート結果から (回答数 4 5)

#### ●子どもが次々と遊びを生み出すのは,何故だろうか?

- ・自分自身の好奇心や興味に真っすぐだから。
- ・板という素材の魅力。子どもたちが関わることで役割が変化するから。
- ・発見できた時の喜びを保育士や友だちに伝えたいから。
- ・同じ遊びだとある程度で飽きてしまうから。
- ・思ったようにはいかないもどかしさ。失敗、ぶつかり合い。正負の感情。
- ・色々な遊び方を大人が認めているから。
- ・板そのものは変化しないが、その時の周りにある状況(友だち・水たまり・道具など)や、その日その 時の天候また様子から異なる遊びがひらめいて生み出されるのではないか。

#### ●安全面の配慮について

- ・見守るのが難しい。危険だとつい止めてしまう。でも工夫して色々させてあげたい。
- ・安全第一で出来る限りのことはさせてあげたい。やってみたいという気持ちを大切にしたい。
- ・怪我をして痛かった。次は痛くないように遊ぼうとする力。怖いからやめようとする判断力は自分でやってみて身につくものだから、体験して学んでほしい。
- ・道具など使う時には、一定のルールが必要であるとは思う。
- ・子どもの力を把握し、どこまで手を出すのかの見極めが大事。
- ・大人の役割は必要な点検で、危険がない状況をつくることではない。
- ・一人ひとりの発達に応じて配慮点が異なり、職場全体で共有する。

#### ●板から生まれる「科学する心」の芽とは?

- ・子どもにとってただの板ではなく、不思議な板だと感じているのではないだろうか。一番は「好 奇心」と「考える力」に繋がっていると思う。
- ・遊びながら、危ないかも・・・でも面白い。楽しいと思って渡ったり、大丈夫かな、落ちないか なと考えながら試行錯誤していく。自分自身で実験していくような力。
- ・「答え」が分からないからこそ、どんどん「なんで?」が出てくる面白さ
- ・自分の中の「やってみたい」「試してみたい」気持ちの芽生え。
- ・「わくわく」「どきどき」「うきうき」する心。
- ・今あるものを組み合わせて、新しい価値を創造する力。
- ・友だちと一緒に考えたり、工夫したり、思いやる力。



とある暑い朝。 ウォータースライダーをしようと準備をして, 園 庭で遊び始めました。\*12歳児と一緒に遊ぼうと考えていたのに、 遊びに来るのは1歳児ばかり。大胆に滑って遊んでいる様子を,2 歳児たちは遠巻きに様子を眺めていました。昨年度とは違い慎重な 子どもが多い2歳児らしい姿だと思いました。しばらくすると\*2 園庭に池みたいな大きな水たまりが出来ました。水たまりが出来た ことで、2歳児の子どもたちは泥遊びをして遊び始めました。そろ そろ給食の時間が近づき、園庭の片付けも始まり、ほとんどの子ど もが部屋に戻ったそんな時間帯です。

まだ園庭に残っていた3人の子 どもたちに入室の声を掛けようと 近づいていくと、\*3Sくんの「シ ュー,シュー」という声が聞こえ ました。なにやら板を動かしてい ます。大きな水たまりが出来たこ とで、板が浮かんでいて、ほんの 少しの力で押すと,シューと動く ことに偶然気づいたのです。面白 いことを見つけたなと感心した保 育士は、隣にいたAちゃんに「S くん,面白そうなことしてはるで」





と伝えると、「ふ~ん、お船みたいやなぁ」とAちゃんらしく冷静 に一言。\*4NくんはSくんがシューと動かした板にジャンプして 飛び乗ろうとしていて、保育士は「まるでサーフィンみたいやな」 と驚きました。するとAちゃんもバケツを置いて、板をシューとさ

せてバケツに当てる遊びを編み出 して,3人で楽しそうに遊び始め ました。本来ならとっくに入室を 済ませて給食が始まろうとしてい る時間。まだ着替えもシャワーも していないし、むしろ熱中して遊 び込んでいる3人の姿を見て、保



#### 保育を語ろう会の議論から

「※1大 人」保育士が計画してい た保育に、2歳児の子どもたちは 乗ってこなかったが、無理やり活 動に誘うことはしていない。むし ろ1歳児が遊びだすが、クラス単 位で子どもを見るのではなく、保 育所全体として子どもを見ること が出来ているからこその活動。

※2環 境 大胆な遊びを計画す ることで、いつもと違う環境が生 まれた。

<sup>※3</sup>子ども S 児は遊び込むまで 時間がかかる。生活の時間を優先 させると毎日遊び込めないまま終 わってしまう。じっくり遊ぶこと で原理とかは理解できなくても, そのものの性質を感じて楽しんで いる様子は, まさに科学する心が 育つポイントになっている。

※⁴子ども S児だけなら押して 遊ぶだけで終わったかもしれない が,冷静に分析するA児と,大胆に 遊ぶN児の存在があったからこ そ,遊びが広がった。

※5大 人 入室という大人の都 合で, 子どもたちの遊びを中断さ せるのではなく、まず子どもの発 想・発見を優先して受け止めてい ることで、最後までわくわくした 心でいられたのではないか。

実際にはとっくに給食は始まっ ていたと聞いたので、「そろそろ始 まるよ」と言い換えた保育士の言 葉の選び方の大切さを感じた。

育士は「困ったな、どうしようかな。」と悩みました。しかし、決

められた生活の時間を守ることよりも、この3人の素敵な発見と発想、それを夢中で楽しんでいる姿 をまるごと認めたいと思いました。しばらく遊ぶ様子を見守ってから、※5「そろそろ給食が始まるよ ~,お船に乗って帰ってくる?」と声を掛けました。すると板をお船に見立てて,「ギッコン,バッタ ン」と言いながら、心から満足した表情で戻ってきてくれました。

5歳児のKくん、Rくん、Hくんの3人が\*1長い足場板を舞台に立て掛けて斜面にして、揺れを楽しんでいました。保育士も誘われて、子どもたちと一緒に板に乗って大胆に上下に揺すっていた。最初は子どもたちも慎重な様子



で「Hくん、もっとまんなかにのったほうがいいで」「せんせい、おちるし、ゆっくり(ゆらしてや)」などと言いながら遊んでいた。
\*2また誰かが落ちると、「もう、Kくんがさわるしおちたやんか」
と怒り、「こんどは、はなれてのってや」と、どうしたら落ちないで乗れるのかを考えながら遊んでいました。そのうちに、\*3板の上で揺れながら我慢して我慢して、そのうちにバランスを崩して落ちると、落ちそうになる方がスリルがあり、何だか楽しくなってきた様子の3人でした。

するとKくんが「みんなでてをつなごう。」と言い始め、3人で落ちると顔を見合わせて笑い合って楽しそうに遊んでいました。Rくんが、「せんせい、もっとおおきくして」と、どれくらいの揺れなら我慢ができ、どれくらいの揺れなら落ちてしまうのかを体験したくなったようです。繰り返しているうちに、\*4板がバシャンと下に落ちてしまいました。驚いた子どもたちですが、何度が板が落ちるうちに、Rくんが揺さぶっているうちに板が少しずつずれて下がっていき、落ちてしまうことに気づきました。

板を戻した後も遊んでいると「ちょっととまってや、もうすぐおちそうやし。いた、なおすし、みんなおりて。」と板を上に引っ張り上げ、どのくらいが丁度良いのかを考え、「Kくん、もうすこしあげて」「これはあかん、あげすぎ



や」「すとっぷ。ここでいいわ。」など、子どもたち同士で板の調整 をするようになりました。

#### 保育を語ろう会の議論から

※1環 境 乳児では 1300×135 の杉板を使用。非常に軽く扱いやすいものであった。幼児では 2000×200 の床板を当初は使用していたが、重くて扱いにくそうにしていたため、半分にカットして使用。この長い足場板は 4000×200、非常に重く扱いにくいが、長いため弾性があり、しなるので面白みがあり、よく遊んでいた。(中央に金属が入っているため折れない)

※板の長さの単位 mm (長さ×幅)

\*\*2子ども 主張のぶつかり合い, ケンカ,言い合いも大切。自分が思 うようにすんなり遊べていること が必ずしも良い訳ではなく,自分 の思うようにならないからこそ, どうしたら良いのかに気づく力が 養われていく。失敗から学ぶ力,試 行錯誤する力,友だちと主張をぶ つけ合い折り合いをつけていく過 程は,科学する心を生み出すチャ ンスを広げていくのではないか。

※3大 人 子どもの力量を把握 し,子どもの力を信じて見守り,手 出しは最小限に抑えている。危険 を見極める力が必要。

※4子ども ある程度重量のある 板であるので、自分の上に落ちた らどうなるのか子どもは分かって いるため、慎重に扱っている姿が ある。大人が必要以上手助けしな いことが、子どもが「自分の力を見 極める力」を育てるのではないか。

## 仮説 3|大人が失敗(危ない)と考えること程,子どもは面白みを感じるのではないか。

半年以上続いている板の遊びの子どもたちを見ていると、簡単に上手くいくようなことよりも、むしろ板から揺れたり落ちたり、大人から見ると一見失敗したように見えるようなことのほうに面白さを感じて、遊びが盛り上がっているように見えた。子どもたちは上手くいくことの喜びももちろんあるが、むしろ上手くいかないことのほうに強く興味を惹かれるのかもしれない。子どもたちは失敗と

も思っていないかもしれないが、へこたれずに工夫して、調整して、乗り越えていく中で「科学する心」の芽が生み出されているのではないか。そして幼児期になると友だちと知恵を出し合いながら、遊びを創造していく姿に繋がり、「科学する心」としてより太くたくましく育っていくのではないだろうか。単なる板に自分たちが関わることで「新しい価値」が生まれていくことに、子どもたちは魅了されたように感じた。



一見危ないこともあるが、注意して子どもたちの様子を観察していると大怪我をするような無謀な挑戦はしていないことに気づく。遊んでいる過程で自分の力量を知り、慎重に扱い、危ないことから身を守る術を学んできたのだと考えている。保育士はそんな時に必ず目を配りながら、「今、どの子とどの子が遊んでいる。この子たちの力量はどうだろうか。おっと面白そうなことを思いついたな。よっしゃ次はどうするんやろう。落ちそうやな、でも子どもたちが慎重にしているからきっと大きな怪我には繋がらないだろう。」などと心の中で自問自答しながら様子をしっかりと把握することで、不必要な手助けや声掛けをせずに「見守る」ことが出来た。ドキドキすることと、ワクワクすることの振れ幅は比例するのではないか。子どもが中途半端に板の遊びを止めてしまうことの意味をしっかり



と話し込んできたことも遊びが広がった大きな要因でもある。

子どもたちがこうやって遊びを通して、思い通りいくことや、 思い通りにいかないこと、失敗したことから調整すること、新しい遊びを工夫していくこと、夢中で遊び込むことの中に、その子 自身が強く生きていくための必要な力を肌で感じて学んでいる。 仮説3に対して、保育実践で必要な要素を職員会議で語り合っ た内容が図8である。



<図8>

#### |子ども|

発見と工夫と冒険心 挑戦し自分の力量を知る 自分の身体は自分で守る力 許容する大人の見守り 失敗から工夫調整する力

#### |大人|

危険を共通認識する難しさ 子どもの力量を把握 ギリギリまで見守る 保護者と保育の共有・理解 VIVA失敗

#### |環境|

子どもが自由に動かせる道具 斜面や角度,高さなど危険 性も含まれている環境

素材そのもの(何にでも変化するような素材)

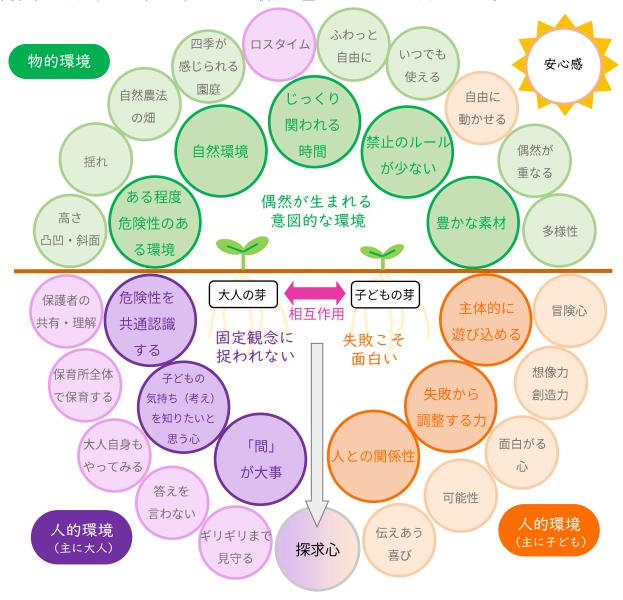
楽しさの湧き上がる保育の土壌

# 3

#### まとめ

"保育を語ろう会"で語り合った様々な保育実践と、そこから"科学する心プロジェクトチーム"で概念化しながら濃縮してきたことが、「大人が固定観念に捉われないことが、子どもの科学する心を生み出していくのではないだろうか」「自ら不思議と感じることから、深い探求に繋がっていくのではないか」「大人が失敗(危ない)と考えること程、子どもは面白みを感じ創意工夫するのではないか」という3つの仮説である。これは、自分たちのありのままの実践から子どもの姿を丁寧に読み取り保育士が深め合い学んできた結果である。私たちが「科学する心」の芽を生み出す保育を実践するための揺るがないバックボーンとなり、また保育実践を振り返る羅針盤の役割を果たしていくのではないかと期待をしている。

話し合いの中で、保育士が子どもに直接手立てをして「科学する心」を芽生えさせようなどと考えるのではなく、あくまでも保育士は「科学する心」の芽が生まれてくるチャンスを高めるためにどうすれば良いのかを大切にしてきたことに気が付いた。そのために保育士の関わりとして、子どもたちに何かを与えるのではなく、子どもたちの内なる力をいかに引き出すのかが重要である。さらにどのような保育をしていけば良いのかを話し合うことで、様々な要素が出てきた。その要素を物的環境と人的環境(主に大人、主に子ども)の3つの視点で整理をしたものが図9となる。

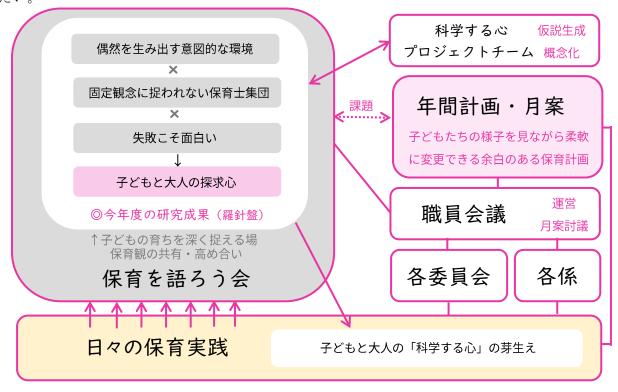


<図9>「科学する心」の芽を育てる要因

図9には子どもの芽と、大人の芽が表されている。「科学する心」の芽は一方的に子どもだけが培う力ではないこと、そして大人と子どもの相互作用によって生まれていくことを示している。また、主体的に生まれた「科学する心」の芽は、やがて探求心へと育っていく。長い矢印と一番底に表した「探求心」の円には、子どもと同じように大人もずっと探求心を持ち続けていきたい願いを込めた。

また、地平線より上の部分には"物的環境"の要素を挙げた。主体的に遊び込める環境とは何かを考えていくうちに、"偶然が生まれる意図的な環境"がポイントになるのではないかと考えた。あくまでも子どもが主体的に遊び込むなかで、身の回りの出来事に驚き、感動し、想像するためには、保育士の意図が見え隠れしすぎても子どもたちは面白くないのだと思う。晴れの日よりも雨の日よりも、雨上がりの日なんかに子どもは予期せぬ発見をしたりすることが多い。遊びと生活などの日課が切り替わる場面のほうが面白い発想が生まれたりもする。メインの活動の少し離れた所なんかでも意外な遊びが広がっていたりもする。こういった何かと何かの狭間に「科学する心」を育てるチャンスが多く潜んでいる。だからこそ物的環境については「大人の意図と全くの偶然との狭間のある環境」をいかに意図的に整えることが出来るのかが大きなポイントになるのではないだろうか。

そして「科学する心」の芽の周囲にある様々な要素が複合的に働くことによって、科学する心の芽が次々に生み出されていく。表紙の右下の写真を見て欲しい。自分で見つけた面白い遊びを友だちと一緒にやり遂げた満足感。心の底から遊びきった表情が読み取れる。乳児期には何よりこの満足感を十分に堪能させてあげたい。しかし子どもたちが満足感を味わってさえいれば「科学する心」が培われる訳ではない。仮説3で挙げたように、思うようにいかなかった、十分に満足できなかった経験も、子どもたちは満足感を得たいがために工夫していくための原動力となっていく。豊かで複雑で予測できない遊びの深さを子どもと共に日々感じながら、保育者も保護者と一緒になって保育を楽しんでいきたい。



<図10>保育を語ろう会の位置づけ

保育を語ろう会を始めて2年が経ち、職場全体に定着してきたことで、予想以上の良い影響をもたらしているのではないかと感じている。職員会議で月案討議や個別ケースの検討会議等はどうしても 事務的な話になりやすい。一方、保育を語ろう会ではざっくばらんな雰囲気で、日頃の保育で子ども の面白い姿を持ち寄って話し合う。意見も積極的に出やすい。複数の眼で対等に学びを語り合う場があることで、子どもの姿を表面的ではないもっと深いところで語り合うことが出来ている。より丁寧で豊かな子ども理解に繋がっていくと考えている。また語り合うことを通して、保育士から保育士へ保育観の伝え合いの場にもなってきている。子どもの興味に合わせた柔軟な日課の変更や、リスクマネジメントなどはマニュアル等だけで伝えきれるものではない。保育を語ろう会で語り合うなかで、個々のケースをどのように捉えるのか、「私ならこうするよ」「こんな考え方もあるよ」と立場や経験年数の異なる保育士が語り合うことによって、保育現場に即した実践的な力として深められている。特に楽只保育所は公立保育所で異動があり、また退職も重なったことで今年度の乳児棟は半数の職員が入れ替わったため、保育を繋いでいくために大きな役割を果たした。

"保育を語ろう会"で課題が浮かび上がってきた場合や、全体で取り組む内容は、再度職員会議などで議論することで、会議の目的の棲み分けが出来るようになった。今では"保育を語ろう会"は、保育所運営で大きな役割を占めている(図10)。今後も様々な工夫しながら進めていきたい。

「保育を語ろう会」月2回基本的に第2・4火曜日実施。13:45~14:30。自由参加。午睡中の限られた時間であるため、休憩中に昼食を食べながらの参加も多い。保育士が心揺さぶられた実践をざっくばらんに話し合う。日頃事務所や休憩室で思わず話している楽しさのおすそ分けの雰囲気そのままに、堅苦しい雰囲気は全くない。職員会議では伝えきれないような、保育観の伝え合いの場や、日頃の保育の悩み相談の場としても機能している。短時間の開催になるため、保育の話題提供の工夫も各職員の個性が光る。今年度より渡邉保博氏(元佛教大学教授)の定期的な参加や、他園からの参加もあり、語り合いに深みが生まれた。

## 4 今後の課題と方向性

楽只保育所は令和4年4月より、公設公営保育所としての移転が決まっている。新しい建物、新しい園庭と新しい環境の良さもありながら、環境が変わることによって色々と見えてくるものもあるかと思う。2年間ソニー幼児教育支援プログラムへの挑戦を通して、これまで大切にしてきた保育を振り返ってきたことを土台に、これからも職員同士で語り合いながら、新しい保育を創っていきたい。今後については、今年度研究してきた「科学する心」の芽を育てる要因を踏まえて、「科学する心」の芽を育てる「保育計画」について具体的に研究を進めていきたいと考えている。仮説1でも触れた「計画通り進まないことを想定するなかで、子どもたちは何を発見し学んでいくのかを面白がる余白のある保育計画」とはどのような保育計画を立てていけば良いのか。自分たちのありのままの実践から、子どもの姿を丁寧に読み取りながら深めていきたい。

<保育を語ろう会 メンバー一同>

<科学する心プロジェクトチーム>

<ウェブ図>

高橋ひとみ(所長・研究代表)

長谷川泰代(乳児)

大田木祥人(幼児副所長)・井上香(乳児副所長)

佐藤茉衣(幼児)

植村博美(乳児チーフ)・松邨あゆみ(幼児チーフ)

塚本真弓(全体フリー)・湯谷道雄(乳児フリー・執筆代表)

野川千春(1歳児担任)・山岸詩織(2歳児担任)・土田さやか(3歳児担任)

鈴木奈緒子(1歳児担任)・坂口千晶(2歳児担任)・関いろは(3歳児担任)